へ 5
4418
2 止

4418
2

随意録巻坤

蓋成美輯録

[illegible]

明治 年 月 日 納本

随齋諧話　坤

夏成美輯録

卯辰記行にたれ〳〵もいふへく覚侍れとも黄哥
蘇新のたくひにあらすハいふ事なかれと云
流布れ板本并芭蕉文集にもともにみなかくのことく
書り案するに哥ハ書写の誤にて奇の字なるへし
漁隠叢話に云王荊公以テ巧ニ子膽以テ新ヲ魯直以テ奇と
あり魯直ハ黄山谷子膽ハ蘇東坡なり是を
はらかして黄奇蘇新とハいふなり

門 へ 5
4418
巻 2

昭和九年九月二五日
購求

素堂子甲斐國の産なり酒折の宮の神人に讃をと爰へ待へ持りそれ中に松の奥と梅の奥と号す家
二冊の草紙を俳諧の教を書るもの之その序
長袖よく蜀吟よく商人ぜふるしの市立とや
笑をまねんそれに綿風の皮財布と名付て出ける
市よりゆるまでしえらぬ天和そのとちかる俳諧の花
花をつけゆく末の一助ともやと寒炉のほとりにまいの
はしなきことをうまでてやよ示かし白松と梅とその
は自己の未熟するをしるゆへて家に待させ侍るもし
山口信章来雪子みつから序

元禄三年午十二月廿日
まし酒折の宮奉納和漢篇あるを
さるれ年甲斐任原田氏吟夕子予に閑庭に入て折
あるの興を詠しるるにそれ詩のる暗に菅家の
虫損 送る詞にありまし八漢の 虫損 さらしそましより漢和
相おもつて面八句としあしのれくるの境にいたさまほる
酒折の宮へをさむべきよしすゝめを葉をそへてしるあ
とすゝめされど我俗そそのいそん抑此神所は新墾
はくはねのうけりまで日本武尊はしら御歌の
ことはしめまてあるしよりむかしの人も連歌の序

かまへてあれの筆をとりけるよしにていかゞなかめありて
いまの天満神のごとし志の道を承りの思ひ
よろこひし和歌にも誹諧あるの故　山口素堂
詩の家にもあらん花遅き庭れよしの雪　原田氏　吟夕
鶯　寒ヲ　似リ　惜ニ　聲ヲ　素堂
大気なる春もいまなるかしこまりし　山口氏　元長
下声も流れ遠くに行らふさうのはき　内田氏　吉賢
鷺ソヨヤ　波　石　間ヽ　蟹　森氏
飛　達　野　萼　蜻　河村氏　吉重
中の日のけ枝見し月見れ枝ろうの花　野田氏　長成

粧　葉　露　無ヽ　情　小野氏　助之

元禄三年庚午秋日

貞徳居士むかしみはくのら標ヒヤウ号を長頭丸と書
ましひ之の人そのころを同しふ先ゆくと自れみ
言くなりては年くふさうのめまとをまて說ろ
ちくなり給ると狂ぞやさましきを
梅さくや去らく地ちくれ京太郎ちせを
ころ以下をみれ吉和歌の標號なりと法の捗復之
て名しの野る説ありサイワコロ小野の扨通の法くれ哥
浄瑠璃のうつといふ中れを法くくする人かり

てしるしに姿見れば此とゝるに云ある此上手にかゝるの
ことみるさうしもてはやされしぞ源氏さくるも古今万葉
いせものゝ後きらくはちくは家々あり百余帖のむし
はうし八十余帖の草紙にて流布しお視わりにこの
物語の書続き書けてく編きんいふ手ても今様の
文章まうしんをせんのこゝろにしてはやきしもの
なれば此るたでちなその文字をとれるなるへし
東まる北ちゝに物語をかいてよほさくて物見書て
古きをはなしたるは中々にきらくまて古きを物をや
さらなり其日記ま云源氏の五十余巻ひつにさらふ

在中將とかきみせりうんさらく なきさうぞるといふ
物語とも出てきたるよりいでてえてきる四純のう称さ
そいふまゝや又古今著聞集巻五によらくとに物語よ
さらの姫君男のおもののむくよさむとちきりて
逢うりしを待とてよめる歌
きさ乃免ほに来るとき人をもたかられ
在みきのあるを待すけてぬ　重よ
うくえくれもきらくも建長ばかりまでにありつるへし
秋田城家士何某甚角一の書跡を秘蔵し持る人ありて倒
の快活（スイクワツ）なる文体をもかれりしるくかはらで花に筆

業去冬震中とハ元
禄十六年の地震を
いふなり去冬とあるハ
此書通宝永元
年なるへし

書かりお便くそう訣ハ五事不浅なる付て甚雫推倍

此世務ら捨て巡路らる旨眼え目出度なき存ある能

いさ膝不お更ハ勤るる事しゃまてよなと下拙ゟ内

せすれお勝く去冬震中空地抜そて哀なる云電

出きかしの遊ひ助とるる我風ともなや玄ち札疾よる

かひ餅浴漬への塩味のそハに任せて酒痴ら法ら

なしく諸事不性おろそかに松山の世のみそとの運亢

交延のさまなり今二日挟の宿酔ハ本寄て下々

酒饌の振舞あるこれ以折々あるる佳檀泉

も一向倪溶して集會し此屋敷此用し

深ニ竅交ハ噂ゟ出て俗之桔槔屋幸八この方處なる作

させる樂しき人会て秋航標子れそらえもなくしく

士農工商此支計しぞよめ哉出七左衛門京川仕舞と

待一夜く武ア左衛門文三月二日の夜やけ中々大いに通

弥兵衛町八之度とも三度まて今先以雪の中

なからも安慰に鯨酔山さへ美泆なる噂ゟ出て

彼屋ほめし事も隣家中々数火の事にて当日

の楽しさとなりて一方心を祝ふるなり

此所は花見ぬ人や家の庭

王維この山水の画譜ニ丈山尺樹寸馬豆人とさ

山なと詠し目のあるき人形の考を申し自作は家
の中に居なる人ぬあつまりられ足人と云花
そ作の守里公より与賞付

正月晦日の吟
山吹を梅の気に茂はらみる事

二月晦日の吟
春雨のひしきを詠みて枯たし

三月の山吹を見して古の詩人の物連歌の手本
世二る俳諧の的星と自讃いあしく花好の
は眼中ひしきを能らい心をなしてらんな其雲に梅は

ら作を出しけら下し

一めくらが居たる丈大内蔵 聖堂の大儒にて七と申浪人
桔梗屋久右衛門奥にてさしころさまし儒者
ろ字にて死罪たる丈は中のる世話也 これの
はめてのるそく三月廿四日の夜六ツ時四十余の女房
を大八車にて喰殺しを清六とて立合傘にて
みせまく帰りても傘をくづつてなりて出四丁目
あけ屋町より江戸町へ曲りて川岸にて三春と
いふるやうり問屋の男に中半ころし死
も成なれて人をも殺し 米八百俵にて六十両

七三郎甚三良霜月竹坐團十郎二十三倍九
平九山村へ幸左衛門傳吉と入組申候
一揺泉院との御所内匠頭後室様寄く事
として三月十四日長矩三年忌の法事芝泉岳寺
一万余諸あり内蔵助とらしめ四十六人の新墓並ニ
法名をかく花ありてくみ見えし侍りて
其くまし世も浮世ならし夢ニて
あるきあらしみてくれしも別し
或人のすさ私しき一首よみやすしと云字病気と
今ははやはやおもしろきとて批判なり

云きあらしまこと言ぬ事なき無之
と感涙して栄啓期か男を生まれると楽
しきといつるを男とうまれ死ぬとのやさ例なし
一猿町ちいさる場のころと堺小四郎座ニ於て奇怪の
比屋の化物出て皆人もおそれて見物人
大傍主目一ツ
大あまりも首く振ひのよりのさ出ても天
徳寺門前日雇取吉兵衛妻廿七まで三月十四日に
一族三男子をと屋下へ名を三番叟となづけ
公儀より御褒美として甚太寺社奉行へ出なされ

此またさらに国十郎死傷よりせめ一子九歳
俳諧のすねてはなさるゝにのまよひなみて
塗龍の父をたふさるや雉子の声
親子の哀にらる此もれあてん年代の句集に當第
遂精エらにて勝力足らず不中い依くも山のかけ
すねくる首増ゑ入れ心、奥て言ま先ハ補をね
待く猶かやく役身投あね便ニ申述し恐惶くく
三月十日
又たゝの書ハ一通く親らつる表あり其口ハ
書候ハ合信れ入有し

寄孔様

虎吟　さら侍りしきくえの雪ぬ句死尾まの宮ら咲
ゑかき年の刈田をまかれ侘風序すそてこやけき
みやの谷風さぞて古くまつくなとい鳴るや、秋色を
古あ棚仕廿年そば地蔵にさ能くさめざしそう
けんどんを一盃をしなしまたさつ様もい侍ま近すに
宜義なしき都く境亭なる此るよきくれと来てな都
みしのてすあて江戸そまつうしいとれがめすな
或人いふ俳諧袖といふ製を伊賀上野れ捐風尼と
いふ人の芭蕉よれくわへする衣まて物のくよ便よ見やうよ

とて衣の袖をたゝみしたくしける服なり
彼尼の短かける未塵老人のもの語なりとぞ名月や
持まして有もの様柱といふ句も指風の作なり
生涯の句集木の葉と号す世に流布せし未塵
老人は俗称堀伊織伊賀の家士にて禄六百石
江戸鹿子といふ双紙は江戸の諸藝者を載る中
俳諧師の部に見えしを

雪柴　桃青　せとも物町 一晶　舟丁 不卜
本石丁 亀翟　西丸　芝 調和　中橋 林中子
幸入　幽山　露言

とあり挙るに亀翟は其角西丸は才丸の誤字
なるべし此板本闕本なれ共著作の年月
詳ならず大坂の延宝比の作と見ゆる續
無鹿子と云ふもあり是は元禄二年の
撰なりし鹿子の誤を正すよしの序あり序者
は松月堂不角なり惣鹿子によりもしは

本庄三ツ目堀 芭蕉　本町二丁目川岸 幽山　石町四丁目 文丸　山下丁 工呼
南小田原丁 蝶々子　日本橋一丁目 調和　伊勢町 不卜　伊勢町 キ角
五郎兵衛丁 山夕　石町一丁目 嵐雪　南傳馬町 露言　伊勢町 一晶
本町三丁目 立志　五郎兵衛町 沾徳

芭蕉行脚の掟といへるは世に写し伝ふる事あり半信半疑のものなれとも其ことわりある条奥州高久角左衛門のもとにて翁の遺墨を珍蔵しけるを写しくれ見ありといひしその写しなれはこゝにもたゝ後人の為に記すへし

一同し宿に再宿をなすへからす暖なるむしろを忘るへし

一腰に寸鉄たりとも帯すへからす惣てものゝ命をとるへからす

一主君父の讐あるものゝ門外にあるへしいへともその道にもなひかさる情あるまじけれはなり

一衣類器財相応にすへし過たるもよろしからさるハ悪し

案汪信民曰人常ニ咬得菜根ヲ則百事可做ス

一魚鳥獣の肉好みて喰ふへからす美食珍味にふけける人ハ他事にまきるゝ事多けれはなり菜根を咬て百事をなす事を得るとおもふへし

一人の求めなきに己か句を出すへからす望をそむくへからす

一多く嶮岨の境を遊ふとも病労の念を起すへからすおかさは中途より帰るへし

一馬駕に乗るへからす一枝の杖をそのまゝの痩脚とおもふへし

一好て酒を飲へからす饗応により固辞しかたくとも

微醺にして止べし乱に及ずのこゑ幽乱起歳の戒条
なかうみを用るに酔をる惜みてあり酒にをさ
とあれ訓ある慎めや
一舟游茶代たる事なかれ
一他の短を挙て己の長をあらはす事なかれ人を
誹て己にほこるを甚い卑しきなり
一俳談の外雑話すべからず雑話出なは居眠して労
養ふべし
一女性を俳友にしたしむ事なかれ師にも弟子にも互に益
なきなり此道にしたしまんとならは人を以て伝ふべし惣て

男女の色を翫ぶ事あるへからず流蕩する事を心戒一
さすれは此道をして一無適にしてよく己を省べし
一主あるものは一枝一草たりとも取る事なかれ山川江沢
にも主あり慎むべし
一山川旧跡したしく立入るべし新に私の名を
付る事なかれ
一一字の師恩をうすも忘るへからざる事一句の理を
うかに解さは人の師となる事なかれ人を教るは己を全して
後なるべし
一宿一飯の主を忘るる事なかれ

媚諂ひをなすことあるまし如是の人ハ世の蝿之比也
かゝるものは此道に交るへし
一夕ハありとも旦(アシタ)を思ふへし旦暮の御とゝむる事
なれぬとりさることなかれ人によりてその分くるゝ事なかれ事の道
多はしきこと八諫せらるゝことをたしなむへし

以上

尚拙なるに七友五竹範ありてまさしく芭蕉の例あり
借書とりかへの事あらし世に十七条二十五条なと
いふもの印行に出しても是皆芭蕉の門流より出
つるものにそむかすして指の一葉をもつて書ハ紙空すり

俳諧するのは殊勝(ケンセヽ)なりと思ひて生涯数へわすれさる
ものとにさとり色書さるゝ人ありとかゝる人々をは
考るに右の證書ハ芭蕉の筆力に似たれとも
後人の俳諧をなしたる流れと思はるゝ書体にて
明眼の人の批評をまちてこれをしるへし
信濃上諏訪李郭 俗称和泉屋五丸齋門 この所に芭蕉自染の
和歌七首をも蔵せしかとも哀傷の流れなるを
田中一閑子まて取寄し後妻のかた國
より引こし得たるを外の人々にもつたえ
其の墓所の中の新堀へうつし置て

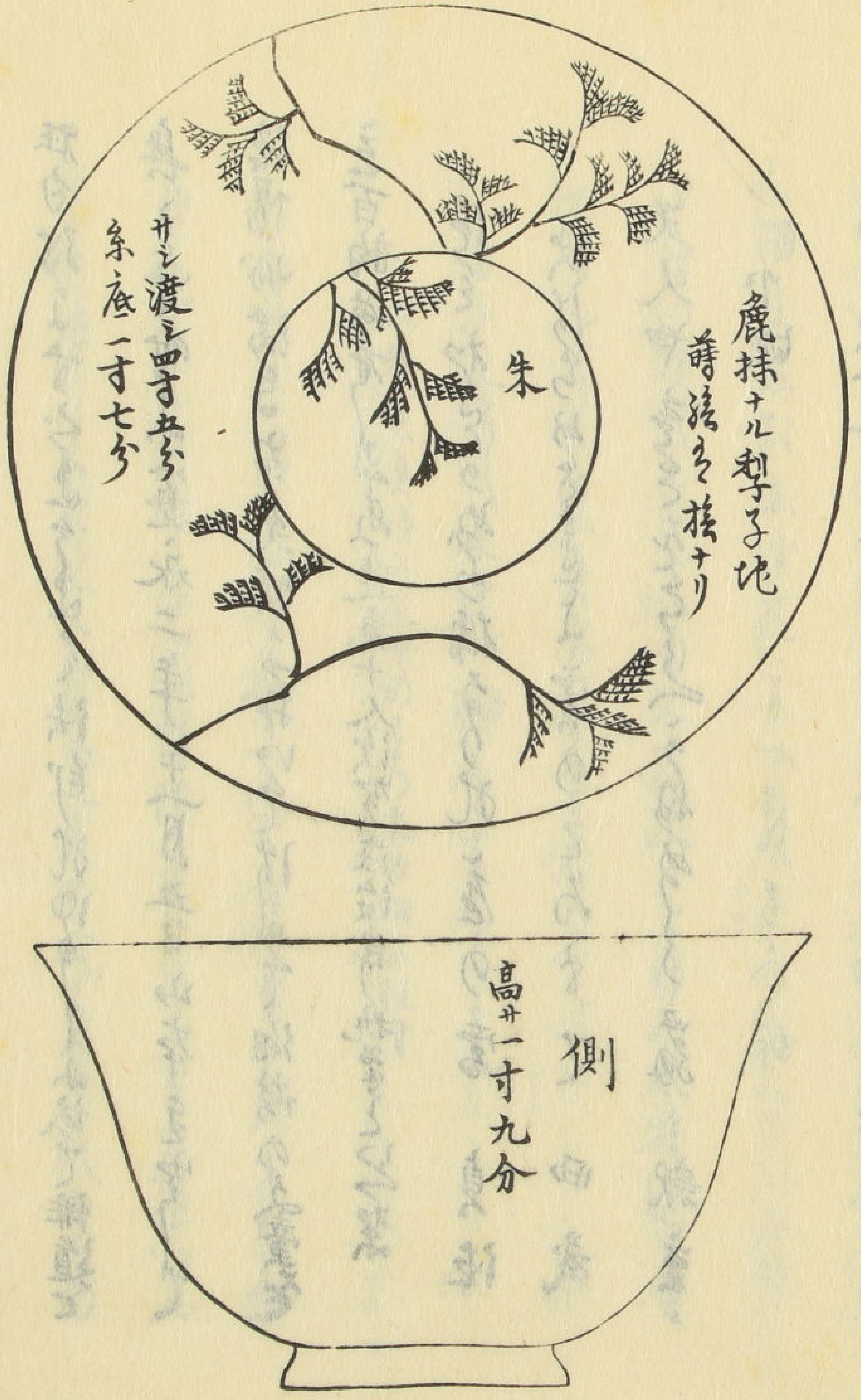
まかせ給ひて
かゝる人も昔ハ夜鶴乃筆れなら
ず今はかゝる夜もわすれくらし
見まほしき花紅葉の盛れとくらす我
れらハ衣くれて独乃淋しき
人乃身のいはれ乃なき身をなけかし世上
志らでもあらしまことにかなしき
その後の君なきかなしみになく
能よき水の浅瀬をそへ
こしかたよりゆめんとたすねてこゝろに入

こゝろなきくさ木までもしほれける
みなかみより流れ来るやなあてのく
流れと消ゆく夢れ世乃中の
五月十八日きましいの詳細をとめての
ところへまのわかきゝ人を打出て
このよひあしく夜見れ乃流れ
その名えの花きえのそりある
いたしうよもしの人とその名まて
とのたくさまに露の消ゆく
ましき良の名をてよひ給ふ一そあらし

やよひの夜の更ゆくまゝにことゝふさき

みるこれ市流るゝたけくるかな

常陸國小川の里松江の家に芭蕉翁湯のころ常に食を
すゝめける古五器二具あり文化壬申の年日向國真彦といふ
神職の人その住るところ翁の図とともに文明中に勧請せし
翁大明神といふ所祭猿田彦神その社に芭蕉翁を合せ祭るとき
なりあて彼國の白を勧をきし松江の家に宿して此あら
ましを語り出るに主その人兄忍のほきにめて右の五器の
中ひとつ撰ひとつをたまひとて来至示しておきをよろ
こふなれどふ古雅なる器なるまゝをこゝに圖す



貞徳ハ細川玄旨法印の門にて詩歌連歌にあそひ
狂句誹諧にすぐれたまひき法印のゆるしに依て俳道を
興したまふに寛永二年十一月五日山本主にして
洛陽妙満寺文城において始めて誹諧の文臺を
立百韻満座し　平安連衆十人次賀庄治郎執筆として其巻
沾えわくとのめか積りける庭の雪　貞徳
火はちらめきまじる雲のころもにて　西武
天人やきぬをとらへのねかふらん　親重
下略
猶又或説に玄旨法印紹巴を請し連歌興行あり

て退散の折から紹巴たちまちに永雅が袖をひかへて
酒に忘れ忘れぬるかへすかへすの袖
とはい誦してきこえけるを継へしといふに永雅遅くも
てあるをみかねて貞徳父そのそはにて
ぬきし捨し衣は棚にをかるまし
永雅ハ貞徳の父その頃衣の棚に住す
とかく付しに満座大に興し入玄旨法印その才気を
称美あるを感して継侍れとさゝやかさに無念し
と貞徳つねにいはれて和漢連歌の式をまなひて七句の
うちの五句五句の物三句にはずして百韻連句を

はらぬ一しと云古法にへるをうかひ学し世上に
俳諧式目をとゝのへもてはやすと云く
又按るに武徳編年集成巻十六天正五年九月九条ニ云
一日　神君信長欽九時一老人謁（ヨサン）参信長　神君に
云て曰先に松永弾正なり公方を殺し其主三好に仇を
なし以前南都大仏殿をも焼此三大事をて古来人のなし
かたきをなすといのなに久秀平伏して恥憤（イキドホ）りもて赤面
し汗流れて頭上煙のたちてゝくるよりしの此度
ふたゝひ信長を背き今害にあふ（ホロ）び承に大仏殿焼
却九月日に終てるなりその長子右衛門佐久通

城をも出て一旦死ぬてのかれたるこの搦捕らまれて誅に伏す
末子一人遁れのかれて永松と号し俗九市中
に寓居すその子を俳諧師貞徳なり
団水か団扇といふ集に俳諧一言芳談といふを載て曰
芦月庵云えいかいは金さしきなるなり
西鶴云寓言とうそとを異なるよういふたくみ
をはなくらするなそ
如泉云附句をはなれてつきよ
律友云附句はなれぬ付よ
我黒云はなしとうはなることをなぐさへ

業西鶴ハ西鶴ノ後の名なり

信徳云 おもしろきが誹諧なるべし
言水云 木綿布子に錦さしたるやうの俗なるのみを
誹やら云 それいふは連歌をやはらげたる童戯(ドウケ)
方なるべし
又云 誹の言ひしてものゝまゝなるを
芭蕉云 それらのいづれも俳諧ならずして
瀏洲云 連歌を遠ざかるものなり
鬼貫云 まことはしけれみれ合なり
誹華ら云 とくのく和のまことゆゑの たはしたる
又云 たはふれを誹諧としきて あらはしき
国水云 以前はさまは読みたる也
誹やら云 誹諧の文字は天下に聖武皇帝の
時ある山に一人誹りさふらふ宋の為におひて候え
常に右日そのまゝ加へたる也
右九格語一同の九人のものもしるしとむとなし意
味あるものゝまゝ書いたしたり出す
猿蓑集餞乙州東武行の発端より末に至るまで此
俳諧なり諸道の動きを帳に載す
是れ自らに任すなり 備へ 経信くた 正秀
底意にもの くみ誹の事なり 去来

肩衣はきさらぎの夜のうそさむき　探志
売れ残りたる絲つかうちらうき　其角
しるしの杉を招めば三輪の神　路通
出し入る馬まきくらみちれ郷　曲水
かきまぜて小き茶碗の底にきえ　其角
鰯の面にはる霧のきびしき　乙州
雫くく蓋をとらして五人口　曲水
ともしの火まさうちも日暮れの書　路通
行月の朱に附する墨なすり　里東
杉はききくき二方荒神　芹花

細き耳ひくく口茶ふきさかりて　其角
このわするものの名の草の中　素葉
ゆるくと高きかひするにさる花も　寒水
二番
蕉しき葉の花盛りさき　荷荷
ちる花よさそうで見きて降る麦は　路通
志きりに新月のかくうつ釣　飛喜
右者は猿蓑に初めて候ふまで元禄年中の撰する席屋
物にての去来の附るまでもまて出来てその時しさまの
名ぞ乙州ならで此戸の得を傳して一覧とるさかる
を出ても我が書きて参りて伊賀の連衆に

徒しめしかれとみはゆ

誹諧といふ書は去る神春九年頃といふ者安二年
に長頭丸はじめて出せる五條の地にてその冥加を仰ぎ
都をとりつくろのすゝめはじめた都の中まで扎ますもり
しかいかハ俳諧を玉くりかへりて筆とる三口物して
出るをとめてくるさき清代の名あるあり　此書宝永二年
上木撰者　雨楓子と跋にみえたり
くせるは戸より詳衣く方へ文通の中に尚方云恚五句
附点夜聘の朧を抑へ俳三ロ此聘の朧りみ役りさるんろち
始そそいかれ流行す此いふく久猪玄赤といふもの文音九井に

誹諧いつくお勤めより鼻気扎老の短夜といひしも心ありて
其のち彼やうやうしく此松風子那々のたのもしさる勢ひに寛
文の勤てられしてより年ごとに京の紀俳諧師五句附の
るまゐ射囲門俳諧ざるいひつきりと煙に燈りけるを
壁りよひ桜子陰て扱老の年ごとに上せて多気わどく
哉不具なり子孫の不呼を寒えて不勤哉と合点して以て
むさとしくる出合々ふんぬあるまじき者　俳諧への約を
てらはしてく此五句附といふ物その名翫郁にひろまりたる
まそいろ孔世よりの前句附は大和国葛城山下良弘
といふもの記しをるなり日去る万治年中に泉州堺に

池亀氏成之といふ好士ありしその頃河州小山村に日暮氏
を名のらん重興と名乗れる能書ありし此人成之の前句
を取初て六句附といふものを始られたり四季の礼句に恋
を添て名所の句とし又を加へて六句に十韻光集の褒美
といふものをなし是を勝として河州の俳友とものたのし
めり是を世に孔雀和なるもの是を奥にあるものに和して
日成之の前句を取て和州の清書をはじめとし次に
和州下田村に華葉といふ法師此道にあそぶもありし
なり京都二条の住居濃氏梅盛の前句をはじめて先
下し六句附をし次第にそのころいよいよ京都にさかん

もとより時代なる事ゆへ点のはしされ庵の勝書にて是まで
ところにて初心のものしくてさしてまたは好み
河手に読始とありし此道さかんになりぬと書つたへ
らをさせるなるべきことなりそのはじめをしば
是を書きるなり
てにをはの詞は万葉集にもありことにことなりて
古今集よりこのかたハてにをはと詠かさねてこと書すを
かれ源氏物語のことばは大紀れなり一部にかなり
て辞よてこし書るなりその文字数定めて
是[illegible]なるもの[illegible]ての詞を[illegible]てなのなし

てをよむされとも詞書をまじへその例なきにしも無俳諧
の詞書なくてはならぬものにて書る人多しこれまではたよく
礼をのつまるをかも老いて雅言を求めて此度そこをひ
と書十余日をへとをまりいく日あまりしめるさくひをもの後の
こときみもあらすしてをはりあへ至らすしてこれを見よ
るすし礼ぶけ

剃髪を賀す
かり上ぬ銀すこのき
てらされるれて
あらせをや薄ろ寒子ふ
すれ味　是吉

是橘か剃髪して医門に入を賀すと　詞書ありて
去ら午ニ狐のそりしなりけり　芭蕉
この是吉といへるは角ニ僕なりし年ある僕を
いふは者にけてこれ吉とよみきるをなかしに文みえ

付之人々にまゝされをしむさむもこそ人はおねにあらて
こまむして呼て特さしとよりき角ニの賞　稀有礼よし一て
二十五条に白花は桜にあらんはさらにあらさるなり
さんといひゝ我家の傳受と云すしと云許六云唐朝の花
は牡丹なり我朝詩歌の花は桜なり連歌の花は桜なり
あられ牡丹まてをなし扁突にも花を賞し数の惣名と注す
花は桜と見るなりをかしろくんて花の名桜なりは花と桜な
るあらんや其れ出る乳薬の出をあ西花とるあしと定所
なとまさき枝葉のそいはゆる名称の花も桜なりと見ゆるにや
よりて正花を桜とする人にあらす桜正花にあらんと初心

の人するなれバこれまでに證ありしをいて来るに花とよめる事
百花の王なりし桜をさして花とをもよめり但桜ならざるして
花とよむ附も必詞書に桜と書り古今集などに見れ
此例ありて疑なしさればこそ花とばかりいひて百花の王なる事ハ
桜は又その中にとりわけたる故に桜に限らざるゆへ
あまたなりけることの意なるべしさくらとみゆるよめる事
百花の心なしされ花を桜によみなしたるもあれし此
詞をもよくいひまぎらかしたる歌ありまた後学
これもひとしを為す事なし許多の説のまぎれしたれバ
其の趣の由をなさせるまでその世業の出されたる花よみ

花等なきの句もいはれし正花に用ゐる事は何れの書にかある
その桜をさらにいひても流俗にまよへるにおよびけるなりと
但二十五条の奥書に芭蕉庵桃青としるしたれど全く偽書
にして支考らが手より出たるものにてかゝる妄説もありけれ世
に廣くもちひて花の論なともみな此人の口實にせらるゝなり
されどもいさゝかの考なしにかくいへり花を百花なるよしは桜
をさて又花とよむにては古今集の例招くまでハ論なきことなし
冬之日 八十歳をと三ッ見る童母もちて
あるまれ諺に七十にかゝる事ハ八十年をと三ッ見るとハ
いさゝかもその考へなくいはれし毎あまたいはゞいくらもはべり

なるへくもし五十一になりける老の六十をこえ
そのうち六十五になりける人の七十を五ツ過ても
なほいの甲斐国なりしてをとひにたよりなりし氏
国人の中のうちなる名あるもの他のうへをいひなる
にみばかりなくばかりの先の世をしるといふの心こ
なる纂集に魚のかわねをそそぐるまでのえんをえても
いるをみけるの裏をえを観しるも言ふの三ツなる
と互に思ひしあはせて花のつし
志談一言記にも云宗因をすこし連歌師なりよし
みのなりて加賀一下りしに月れてろうさく咲て

あわしんとみえて

されバころ花のひほしぬれあそて桜
まさの年の九月かゝやく下り十三夜に群会して
去年の花そ桜れ森の風に出した建ハ
花なりはてきの月やたのさくら
ゆ年五月集会の時内曇れ紙を出して書に
一句とありそれを
五月雨や天下一まいうちくもり
といふるをきゝつけて俳諧師になりしとかや
東なる宗因が集むかしの跡に梅翁ぞある

撰者これを見まほしく世のあはれなるにつけ宗因
をはじめとしていにしへの風体をも論じておし
なべてゆかしくおもしろき事にうつしなれ

梅翁傳

宗因ハ肥後国の人姓ハ西山諱ハ豊一(カヅ)俗名次郎作と
いふ前の松代侯加藤風虎君の家士なり寛永九年
不慮の事ありしより君侯ハ奥の岩城にさすらへ給ひ
て後此時にまかり始山城の伏水に隠る往年風虎君
とともに釈ね寺の豪信法印といふに和歌連哥の
道をまなびしが今は世に立交る望もなく

捨て心すむ月花の嘆数(ナゲキ)をとして形ばかりの名を
あらためて宗因といふ号をも一幽子 西翁 梅翁
野梅子ともいふその居を名づけて忘吾斎と
云また向栄庵とも号しきて連歌に志ふかく
かさねて里村昌琢のつゐに其の奥義を聞きとめる
が彼つひに難波にゆきて住る所も定まらずこそ
正保の比西の国をめぐりしまた数の便宜に浪花の天満に
居をうつしまたより連歌一代の身なり西山三翁集
といふ書を著はせり
翁連歌のいとまに松江重頼を友としていはゆる

檀林とは人名目なり
未考

をしき事しの後ことその流れ今まてさかりしとて都鄙
一みちひころの格調にうたしなすそのいはんとするへこと
えらりて俳諧檀林の一体をなさし出せる事義は
さてはて西山のいふ風をうたひなして古風をや忘れなり
今はかならすへて俳のいはるる人の許きるをきけく西山の檀
林風をあさことるりえせ然こそ心寛やうに調そいとまる
しや又云檀林の邪路正風に破析きくらすなど語を
きそめて褒貶するもにいとも俳いかみに只詩歌の
体の代にうたりゆくめるなてたてし論をもよそ更
めききつりいかし一風をも各連歌のうまをきくしらぬ

安藤にをそてなるとするしいはまてしたそれなりしを
大魚淡しもしたをかむかへてしまき荒木田守武なとの
式目なりしをれてをしまり
其後松永貞徳といふ法師あくかりの筆をとりしこそ見て
此あるひは文字ちらくしくなしおよひわさされともなるれ高く
めなやうも俳諧する心をくまぬ大かたし連歌のをもしへ
あたそのもよわし西山は檀林よりも密なるやさしき詞
うちくえはるさするのみまてその音ともなる花柳園を
いみし一風なとしさゆるる数へもしらぬきいてその流を
のもいかれとなる人を称連歌の席なをはきさしたる

すべはりてその身にふれるもの心ほどきまぬ事なくらんぞ有
その学問ともに秋家のえいかんとともに人出て達人なしとするの
教化曼倩らが滑稽のことわりに説おしつていかし一つの儀にいと
ても百姓のみなびいたる教をなせりば能あることは山への
寄やと偽りてまたそくなる里のおもする教のいつくしすりつきまされ
が翁をしいなりがたおくきは人なる能文れ御なきさくしなり
天下没教の道もまさくあきなるむへしともていふもの性達る教
などやける賢きそもそもさる書をとものみてまとまことのべき達
聖の教をさとらんとて徳いをきそへいるものは人れ都
ままるなるまでに山の岩根のきしまでて

まつえんの教をぬり道にたく歩みれ玉水に息流きて
八十島治門の梯橋にみちとるみすぶ似たりうし
義あえいふんそらよき歌の心をかなるなみそふ達なるわ以後の
郷はいのみなかの人の見落ひてあとあそくしくきし方ふりそれ
そしあそんかたくきやなるすなれ山すの声をとる義んであ達
むかのよの昔くわしくの桜花こそ山はよりつくみえる先ち花の
それちる岩は時あれ夢をとおしみ須磨の笛屋の
名ひねに声の浦れかをとなさけ雲やしとれや
埋火れもとは年の人るなる残なくしみ式をあつ方の
音はその見し落れむりしえきなぞひかをきみて西の西れ

親むつましからぬを忘る心にくれ優するゆへしるし
なるかぎりかの三教集にかきくはへはべるをゆるされんと乞て
こゝに翁の風雅の誠を忘るゝことそれまであらざりけれどもい
ふことおしめたまひけるとて聞てそれおぼえむかし
まさむ人をよりふかくくすりて俳諧のうへにみずて評する
少年のころよりたしなむ人のうへそかれてよさくしすゝめしき
そのしこゑれちずかれよき人のたえなる事ことそれ人の
ひさしすら實也よみあらはさるゝ人をたくあるかぎりかたりて
世の教のるすさびと言なるぞそれをいとゞことさらち
くれのわざならね心を歌に寄れけることゝて名をのし置ぬ

みまかれり

翁齢七十八にて天和二年壬戌三月廿八日に逝せらる
法名を實者院圓齋宗閑居士とやいふなる
いはひてやある方にて丈草法師が筆蹟をみしるしけり

詩二首

新涼覓句風光前院落清陰竹樹斑笑指眼華酬酔
裡漫求腹稿悵眺間満擡山色連長等一簀泉聲超
小閑蓮漏何如蓮泥濕主賓對坐不離閑
竹窓夜静鎖春霖微酔幽吟屈老襟灯尽香消高
枕臥却知詩酒両魔侵

伊丹の鬼貫も肝のつよき上手なりしとぞ通称三郎兵衛
といひて上嶋家の代々造酒家なりしが故ありて平泉
一とせ江戸に入りしに或時は屋敷に仕へありて仙の宮
それの殿より召されてあまたしほどひの久しかりし俳諧
に二郎兵衛事つまるよしなどやうにておまし八鬼貫とひて
そのかみは俳の名はそれるものぞめし出 てなやまさせよまで
おのずとそれちやまつ本屋にて出摩に手ありて平伏す
仙すてしもそいろんの名やを改めてはさせんのと殿のみ
まず時よ鬼貫ら跡へてあそびてはたまえんときさへ見えぬべし
さそふは麻よ出佐の仙集の画る小町の掛絵あわはかれ

なのは掛物の絵ちく賛してなりしとかよみなんぞひまひ
て屋にてたちいで出さ彼の人よ此頃こひてまたこつたため
らかんば業たづねと添て小町れうしられどもにえあちら
むけと五文字書てさて差出しあまりよみなさしのぞき
すく宝後の業して志つかふ 筆をとりてうしろまはりし花の色
と出来てたのまゝ入あ侵して差出しありけるよみなしめで
無てかのぞての三まで此三郎兵衛の事よいひのつたはれ
いとはつかしとてけふすゝまひまで写し止るとぞきこへ八
浪花の大江丸このよしをかたり

談林十百韻乃序

俳諧はしるきき論参に此道甚さかんになりて其風俗
まちまちなりけれはすなはち川の水の流れ淵にそのくるぞときとてかくよ
う瀬となりし瀬もあさくなりて深渕に首ゝ付
たりける色臭しさらに八九人の俗れ非　やみ久しくれ
天の下にかくれ猿の拙著たる夜俳諧師ととはいふへく
呼く會合して向後の功ん悪にそなはんするところ
謡と此そりそろって多くなりにけるもすくなく中に
ふれ摩なとも我あとさきれ俳諧談林ところやへ全き
すくなくりよりれたりてみな人談林とはひるう寸
その打売難波江より道の名僧梅翁不斗下向ありよ

さて幸ひ落江に江戸の海の廣きにおもひて
あし談林ここの名を庵にて遂てみすゝる夜なし
とひなてすてに百韻を無所す次而おもしろきに
人ゝし身あをよ十百韻をとつくさらなひて六七度
よりて終によみなし半ぬ談林へはとむる誹学の
日此十百韻の下孫あらくそ遂りし俳れ新
愛宕海度のまゝあよ板行して見せしめ
あやとこれとより談林の古くなき辞すつき
にあらはるべくもなくもと仕りし俳ある九市
中に宗年よりとおもつるなるくるきものと今まで

ゆゑらしめて一ツも見ゆざる二ツの悪をも見遣ハ水火の二河にて
中に守りの白道ありて白道の有る事をしらむとの分言
外談林の法是なる人志ある事に眼を付くる事し
東る故談林をといふ名まく宗因の権輿するとおもふ所
人多し此序にて見遣ハ雪柴等門下八九人の者の集
意せる江戸神田鍛冶町に在し俳室に名つけ
そめしとぞ此年歴を尋て追て考ふへし
越後国高田今町聴信寺（一向宗）に芭蕉翁の此の衣服
を蔵す地色紬（ツギ）の袷にて嵐色同く第一筋筆一本墨
硯（丸形）なり自染の衣の名なく二葉又目やかな侍や

又自画の儀上に別に花の讃をなくりまた是なるもの
後支考此翁の此寺に至りて正しく審定（シンテイ）の文を付
置て翁の此儀自画なりと見定を哉人のいひしを画ハ
翁人に書あたへて
素林といふ者連歌の家にて習ひあるなりけるに仮りに
まなび雅俊秋風なとくの絵書とそ清らかなる井上なる者
服にの手に絵の事に於て四五冊めくりて芙蓉など
どの林氏々出されけるは是を見つ好むぞ村并へ考て
易しかりける事ありと後の世なる事も今月を載
よく見ゆ事に素林といふ者は信頼すべくあらす記する之

さて此一世の附合に於て秀逸なるべきを撰んて挙

雪丸げ集

陽炎の中の肩にかゝる紙子の那　芭蕉

此巻乃二折ノ表

けふ乃あひ子よぶる　星月夜　嵐蘭

くんでこそ暫ハ東山子なりけり　嗒山

山陰はきびしく松林の雲の継　曾良

十一句め

狼の番して明る夜乃月　嵐竹

あきらかに松風清書に云妻林の星月夜にのきはる逃して

夫秋ハ金神節を掌し天高く暑退き衆星乃

光彩清明にして銀河きらめき月なき宵も

星の光月夜のごとしといへるなりそれ月の字を

天象を影輝（エイキ）れなしたれるなりこの松林に妻林

を聯（レン）るなりその余まて妻林あるをきこゆる覚へ

雪丸

文月や六日も常の夜には似ぬ　芭蕉

露をのせたる桐の一葉　左栗

朝霧に飯たく煙立分て　曾良

案するに此義月なくし文月と月れ字あきし

よし白無の字もつて月の字すくなき事秋とハなすへし

韵塞

そのはかの人をとしよれ神しれ　芭蕉

此巻裏七句め

霄闇をあらする神の宮うつし　支残

北よりの萩のうをそよたさう　許六

八月ゐて旅だりしうきゝ服綿(フクメン)　洒堂

案るよこゝまをすし素秋ともいふ（きゝうされと

雪やみといふ朔の月のさたもま六八月といひて

月の字なくてあらハして月なるすしといふなるよし

古人の説なり

鄙懐序

花そ雪よ河豚の非んとする歳暮かな　涼葉

すこし曇れるたきくらぬこゑ　千川

春の月
門番ハ寐気まつすむ月を見て　芭蕉

たさむきそむ家前栽の柳　宗波

林のむきよ毋しろんでたるす裏庭麦　此筋

蛍も一夜をねさめのちる数　習子

肌寒く疼のうそく下あ形し　千川

案するよ是も秋の季うるまさとも月の字

ありすくに枝を附出されハ素林といはんかハ
右外にも两句あり此中　星月夜文月やの二句全く素
林といふへし後人是らによりてよく考ふへし
去来抄三巻ハ疑ふらくハ去来の筆記にて後世に益
ある好書なり往年暁台の手写探嚢の中に秘蔵
ありしを借得て全部写し取て予か文庫に納め世に未
刊行(カンコウ)せしあらす安永年中一音といふもの清書なして
尾張の暁台か板に刻みなりてまゝ世にひろめて
その賜(タマモノ)をうるもの多し彼の板行の書ハ予か細にり
てや古實の篇を除きて上木す故に流布の本にハ

故實の篇なしされハ此篇を書加へて全備せし
むへきなり
浪花の大江丸か俳懺悔に書しを
　牡丹餅や赤小豆のかゝる林の色
是躰の事に付なしとハあらねと此句ハ其にいへハ
第敷のあるへしいつこの新らしみをは得られなり
と自負して記せしかなる白雄か春来の東風流(アツマフリ)と
いふ集中の附句にみきしもれとしてその外一字だに違
ふ所ありされと後の人をな係るところの多き雜なるき
在るなる思惟すへしとありされハ昔より幾億万のなるあらん本

僅に十七文字の中にて述て松のつらなき数となる事を理
なり忠知ハ白炭や焼ぬ昔の雪の枝といひて擧世賞
誉し白炭の忠知とよひしよりいて是を一人つる化
なんとしおりふし良保か被枕集に白炭をなりぬ昔の雪の
枝稚考となり此集ハ寛文癸卯夜刊行なり忠知同時代と
おもへる是をいつはりて先出するにや殊に不審なき 今に學者
あるやしきことはいりきも不審のあまり

素丸説信かし

江戸水口小坂町に住して其名を表号季風といふ人の許に
季吟の書を譲りて甥なり即季吟門人芳舟といふ人
より讓り得るものなりといふその文

きれる松尾氏桃青来りて平に改名を
望ぬいるすみかくハ雲鈴の名といふいひ行ふ
なからめてを其名を呼給へる其の
月のあれのむかしを忍ぶの芭蕉の耶
とありて我に和しき人の詳をかり無俗いかなるまや 螢
忍ひして後此許をたまふ
増山井寛文三年十二月の奥に開見するとありて注に
堀川百首にしてたちの松かけかさにそらみすく猶
なかうに年をこえすれ 後拾 歌長 師走の晦日の夜なるさ闇に
のそりて暮をさらさすに来てなるに我宿をみきハ

ゆくる事をあらはし吉凶のまさに見ゆるとありておほとを
此集れ吉相をいひ出て云々此説いかゞあらん壒嚢鈔にある
き説なんどもかなはせて見るさへおぼえすることもうこのみと
いふ俟見えし書きつゝひとへるゝよしまでもなきことの歌よ
のかきかし聞えてよめる心ろこと心ねてし人をおもふことよ見えし
いかなる誤りし俟の字全く聞の心なりとなす日本紀に
も間諜あるし俟ノ字をもウカミと訓すさまをそうみ
といふを説するべしされど玉もて萬葉集第十三志貴嶋(シキシマノ)
倭國(ヤマトノクニハ)者事靈(コトダマノ)之所佐國(タスクルクニゾ)叙真福在(マサキクアレトゾ)與其 契沖師の
説に事靈とは言にかけて言靈の義なり 第五に言

靈てさきはふ正字なり吾國は言に靈ありていふ也へ
いふ心なりしある國なりといふ義なき事も字
なきし云々加茂保憲女集序に万代てらす日の本
の国てなし言の葉の心にみちたり此つゝ云々又天暦の村上
帝の御集にもさるつる五十日にて
ひとくせ言にはかるゝこともありなる百と結と月し言ふそん
御返し 御製
いまひとたび見るとて百とせぬばかり我ら月をそなゑ
ぞらんとりあそせて言靈の義を心得べし但俊か
歌論の説をいふなるをとふにありそんにこの解し

うつし侍れ人をは考へてし
又曰浪花の昌喜か説に菓本の手本手らく熟せん
やうにとしいひてするなるへしといふ此説は
さやうけるなとより出て上手の口よりの勢て詠吐
するものなるはといへり
予曰附句読人をそこなひし師を西野老人之その云
古人の詩ハ解しかたき多くハまたし講説を聞きて
かしこやもしに師の曰詩を必講説をきくは不出
して其意を謀もれは詩を一章けつくなるは只よく
熟読してみつからさとれあるところをしれとへは偏

よく感する所ありてその詞を口すさめは俳諧の句
まつ其趣の芭蕉の句の中神心まて届はさるものか
されは其本意しの論条をまうけて解する老らは
とても多くその事に的當せんは少なからんと深く
ありしをいぬまて多年此道自然に豁然として眼の
ひらくる時ありたとへは禅家にいふ大悟徹底に似て
門より入ものは家珍にあらすといふか如しさて一句の上
そ其詞をさへてこれにありて好みしく思ふへく侍へけ
されはよしなきことまぬへて大かた理をたて求れ
ものはとかく句ことにくるしまさる物との

形容をつくるかゆへよしなかるへし山川のさまをさへうつす
むかしのはやき詞あるものの隠辞の続けからくして行と
なくしの人も今なる事あつかひし俊成卿の詞に歌はなく
よみならひし詠ありける小歌とかすへくえんなるをそ
まことのあるきこゆるかれかあしくあるへしと又曰うるはし
ありのまゝに艶なることまてきこえてひとへにそれとおもひたらんにき
らんと世にいはるゝ元来詠歌といふもの心なりしかよりえんなる
ものからなくもなけれはにしてなを艶なる幽玄なるさまにきこゆる
すなはちかすかなるかしこきにとよめしものゝさまを
接よろしからむ一つとなれるをさまを得てとものなんと

すゑ遠く世を捨てけるの西方の欣しあまたくらん
又うち一等と二等と下品とてきこゆ中宗し後学の
よし工夫すへきものなり
其角の絶句肆なめき
唱歌
うめれ児留そのまゝにむすめちのひめさくらさく
花の菩薩の数しらぬものゝ此方を雲水の世を
其濃なる色のつやナムアミ多く
池の蓮に其気をみきれて三十六の吉田の里
あともなくて下よひと夜さかりのれあさけ小夜々

くまんナムアミダ〳〵

身よりしむ法けや釈かのむまのそくぬよそ見をハ

弥まちよまちきとて法いしかむれのをひろむり

うほんれるみさのふねふく盆ナムアミダ〳〵

書の中の庵よねをとえへてうるきなるけを見ハ

考られしき面の法き遣しあのゝそる草れ花目さ

方しあよ花ひとうすあ遣よ身さひろつナムアミダ〳〵

この暁う一夜あをれ夜をつてきすく聞しきれ

そのしかしきすいときさむ

守人そて子親すりはゆらあくき

壬子冬夜

晋如菊直賢

右其角書讀大坂梶木町森三郎兵衛所持境の喜せい一說のある晋子手澤也疑ふ名号不審あまたところあれど我書るまゝに附よのそみて牡名を書かるもあるへし

喜せい又曰此文章を案するに當時妓子代すと及追善の作なるへきかやとそうさまあるへきと見

雑

ひさご

亀の甲あつらゆて附を嗚らせん　乙州

亀ハ牛糞より生るゝといふ考　玲碩

ある人云史記の亀策伝を引証しとまさ一説にすへて亀ハ蓍あるの下にまとひて生れ蓍陰を作して其事なるへし照合も枯るゝするにつきて見ひとつせて牛糞より生るゝといふ事ハ身ここに至り侍りぬ亀の類にあらすして他を求てとらへ云るとしてそ拘るに亀策伝の心をさこゝに見れすして亀れ事をとらへせるなるか雑といふ字を転して魚をやうなり古人名れ合するをことさらにとらへそとまけて雑ときつきや只雑の字なかるまし疑なきにいゝとして雑の字なかるまじるんそ

猶亀しむつきさて此このめといふなそその俗にすなれともかするものとなれりゆ

新六帖

川越のをちの田中の夕まくれ

なにそときけは亀のなくなり

此を證になすなんとく後人五月やみ　其角

ことさらなる引合せに依て鼈亀なるらんと此にいへる和名抄ニ鼈唐音ニ并列反魚鼈亀字或作鼈　和名加波加米とありそれ鼊鼊　於保加米　蠵亀　古加米　秦龜　伊之加米　等ありて亀の類みる通して加米といふ亀に田舎まてもいへるなれのなりそこめともみをいふ事をとれそ出す皆てる通なり

あるつしひかりに松のみ乙列一時憤激のうちなりて
作りたるも已知ゆくは但しまくらは臆度のうちなれて
分しかるにひかしすつてさの形るをなきその作
老の心中後人の松のとりとをたてみるほのるつき
まや此るよもまこれ人々の猿説あるるとまたるさ
まよ猿之れ説るまとそうけのいきさるそれなし
猿簑集ハ大草子の跋に
猿簑者芭蕉翁滑稽之首韻也非比彼山寺偸
衣朝市頂冠笑云々
なきも猿の松るよりなるんとなかり後に廃発一簑高し

張有補丁詞漁人云と止まりてよし猿子のとは
るをおほにわきまへて文章を眺めりとみえさるは猿
れ故事の出所識者は彼是向試しに審かにせよ
さて按るに古今著聞集巻二十魚虫禽獣の部に
是は常陸國多賀郡に一人の上人ありけり大
きなる猿をかひけり中略ある時此猿他の郡へ行て
或人の許に白栗毛なる馬をかひたる馬屋に至り
て件のかるをぬすみてのりいたしまてその厩より
多い下臈のありて取しといふ布袋ぬきをさして
縄を腰にさしてあそびありけるみえてかへりたる云々

又史記項羽本紀ニ人或ハ説テ項王ニ曰テ富貴不シテ帰ニ故郷ニ
如シ衣テ繍ヲ夜行カ誰カ知レ之者説者曰人言楚人ハ沐猴ニメ而
冠スルノミト果テ然リ項王聞テ之ヲ烹ル説者ヲ　注張晏曰沐猴獼猴也　かゝる
ことわざをてのく書るまてそ称す也　僻
説なるのう急はらく記して後人の批評をまつのみ

落柹先生行状　　佐々木尚義

先生氏は向井實名は兼時姓は菅原河邉左大臣魚
名公の裔なり其先肥州の人某考より帝都にうつり
世々儒家にして仁徳を以て称す その法をまもる
醫術に達す天下の良醫たりいまの益壽院

東ニ落柹舎の記ハ
作者去来也其後
芭蕉此家ニ仮居
ありし嵯峨日記
を書り

法印は先生の兄也落柹舎は嵯峨に在先生の寓
居なるより往歳芭蕉翁桃青此をとひ来て此舎の
記を述しよりおのつから此舎をさして落柹舎と号く
此故に諸方よんで落柹先生と称す去来も俳集
に載る所の名也後洛東聖護院にうつり幽窓の
うちにうけんとひそむといへとも東山の
峰にあらく近く月をかけ鴨川の清き流の遠からず
ありけるのおもむき五月雨の窓をうち秋雨夕れ
鏡なる其雲自然に先生幽居の意にかなひ山水
のをかしみを称して洛東の地とはなりぬ先生を

より天資孝弟克養純固にして平居恂々たる儒也
著述の詩篋も多かりしとぞ和粋貞諒にして
智ありて偏く察するにたるは小なるものを詳に
して壅蔽のきざしをとゞむはじめ紫陽に在て
ひとゝせ武芸を講習しける故実をきはめ
御術を大坪式部大輔廣秀の嫡流福山某にきく
和を笠原氏のつたふる鈴術を安部の何某
にまなび共に其奥意をさとり軍を甲州一流の奥旨を
きはむ其後浪華に帰て又薄田某の門にあそぶ事年
ありへ八陣の神法およひ五法陣の品を伝受する

橘家傳来神道の秘奥三種神器五科十種神籬
神垣風水磐坂丁満去金華の諸伝を相兼す
まねて餘力あまれば古今の人物を論し忠義純確
なるものを見ては撰て鑑とせんとす風雅の
道に心をよせよみける和歌すくなからず其の外
芭蕉翁によりてその風をきゝこのみそめけるまゝ
起居の笑話も自然に風雅一体の實より出たるを
なれば此道によりて貴价公子なるものまた柴扉
味ひを績ぬとよみ寸四寸の俳師をまねきて当世の墨
客を流才を挨き簡傲非笑するものとしてまたその風采

を感し惇睦（シユンボク）間言あることなく心服謁拜して序
下まつりしかはまた其先達とす凡ての人あつくなる
るれ多く守するの篤き文武のすへていつきき貞
諒人を感すること又それの才の称よあけて薦
むる人あり先生もとより官仕の途をたち退て
まつらんことに仕るきはめて恭愛にて家ことを治急
内かのかぎりやうち我用れ其を制し使令を給
するおのしその役にたへさるものあれは誠意懇切を
労をとはる一ツ人のこゝろをつくすることみたのしく處（シヨ）する
裕（ヨウ）如たるいえんやその子弟宗族朋友の間にあつ

をやめてかし家にこもりて道義文学に耕し耘（タガヘ）まで
も必其の労をとふらハさまさまにすゝめ比年の艱
苦我とひ病をうれたねすして後やむその惻怛（サツタン）の意
九心其のひさしきにあらわる命なるかな秋葉零落し
暁の風にもろくも山丘に去るかことく病あつくし
まして寶永改元甲申秋九月十日聖護院の寓舎
に没す享年五十四宗族子弟聲をのんで寝門
慟哭す遂に葬事を営み東山神楽岡
北鈴聲山に葬す是先考の兆にそへるなり

賛曰

先生為リ人ト　孝ヲ弟ヲ貞誠
事テ兄ニ竭シ力ヲ　處シテ事ニ必ス止ス
有リ文有リ武　風雅華英
存テハ思ヒ其人ヲ　亡テハ慕フ其名ヲ

芭蕉終焉の記をしるし病中日記の切
四日於木曾山中さまよふより朝鮮人参半両道修町
伏見屋よりも取同く包ミ十五袋取天気よろし之道
寸より世話ニて洗濯志女をやとひ師の旧夜装
そのかまゝ流れ夜装をすゝく　園女より旧菓子
并ニ水仙を送る　支考惟然介抱次郎兵衛とても

手届ず之道とりはからひとて舎羅呑舟とりよ
すれ者ある按摩をとりけまつる今日三十度余ニ及ふ
度ごとに裏急後重あり
右二条をも此折節書の折ふしかひて堺れ
喜齋よりも写し已をしふよりて幸ひにもなて母
書くまゝて筆ノをやすくむ

跋

先君以靈慧之資掇天地之惨舒推遷人世之悲歡離合而妝諸徘諧意匠開於無數幻緣筆下洩於無盡化境蓋其性情之真與時相感與事相觸自然雄渾豊潤

使人恍然心醉焉是以
四海騷人郵寄唱和而
乞正者推以為一代宗
盟又遇先輩一時觸事
感意發之於言有不可
知其旨意之所在者則
必徵之史冊以迎作者
之意咀其華含其英究

其枝葉根柢而後止其
餘先輩軼事及簡冊私
牒有足以傳世者皆裒
收而不遺久之為編凡
二卷名曰隨齋諧話謹
與家弟包昌包德等比
對校讐鋟版而貽同志
雖未足盡先子學之底

蘊亦足以觀其浩博矣

文政己卯仲秋

男　夏目包壽謹書